

熊本大学広報誌

熊大通信

vol.

56

2015 SPRING

巻頭特集

新学長が語る これからの熊本大学

特集Ⅱ

まちをつくり、まちに育てられる
「まちなか工房」10周年





CAMPUS SCENES キャンパスの風景

熊本大学卒業式・修了式

3月25日(水)、熊本県立劇場を会場に平成26年度熊本大学卒業式・修了式が行われ、学部生1,709人、大学院生641人など計2,414人が本学を巣立っていった。式後、会場の外では、サークルの後輩らが花束や胴上げで卒業生・修了生の門出を祝った。



贈られた花束を手に、笑顔で撮影に応じる卒業生たち



熊大通信 vol. 56

2015 SPRING

熊本大学広報誌 熊大通信

*皆さまのご意見・ご感想をお寄せください。

- 【発行】** 国立大学法人熊本大学
〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1
Tel.096-342-3119
Fax.096-342-3007
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp
- 【編集】** 熊大通信編集委員会
田中 智之／委員長・大学院自然科学研究科
中川 順子／文学部
黨 武彦／教育学部
大脇 成昭／法学部
中田 晴彦／大学院自然科学研究科
谷口 まり子／大学院生命科学研究部
首藤 剛／大学院生命科学研究部
田中 尚人／政策創造研究教育センター
西川 洋子／マーケティング推進部広報戦略ユニット
- 【制作】** 株式会社カラズプランニング

CONTENTS

- 03 巻頭特集 **新学長が語るこれからの熊本大学**
- 11 研究室探訪 **民俗学を通して“人間としての技能”を学び
社会で活躍できる人になる!**
文学部総合人間学科
民俗学研究室
- 13 特集Ⅱ **まちをつくり、まちに育てられる
「まちなか工房」10周年**
- 15 国際交流 **インタビュー
熊本大学から世界へ 内門真之介さん
世界から熊本大学へ 郭 光植さん**
- 17 卒業生ジャーナル
- 19 KUMADAI TOPICS
- 22 熊本大学基金よりお知らせ

表紙／2015年1月31(日)、工学部百周年記念館で開催された
「文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」
熊本大学キックオフシンポジウム」の様子



〔巻頭特集〕

新学長が語る これからの熊本大学

2015年4月1日、原田信志前理事・副学長が、第13代熊本大学長に就任しました。

国立大学法人の在り方が大きく変化しようとしている現在、

本学は、文部科学省が支援する事業である「研究大学強化促進事業」*1、

「スーパーグローバル大学創成支援」事業(SGU)*2、

そして「地(知)の拠点整備事業(COC)*3に相次いで採択されました。

これからの熊本大学はどう変わっていくのか、またどう変わるべきなのかを、原田新学長が語ります。

*1 各大学等における研究力強化を促進し、世界水準の優れた研究活動を行う大学群の増強を目指すことを目的とした支援事業に採択(2013年度)

*2 日本の高等教育の国際競争力の向上を目的に、海外の卓越した大学との連携や大学改革により徹底した国際化を進める国際化を牽引するグローバル大学に対し、重点支援を行うことを目的とした支援事業に採択(2014年度)

*3 大学等が自治体を中心に地域社会と連携し、課題解決に資するさまざまな人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的とした支援事業に採択(2014年度)

第13代 熊本大学長
原田 信志 Shinji HARADA

熊本県出身。1981年、熊本大学大学院医学研究科(博士課程)修了。同年4月よりマサチューセッツ大学医学部病理学教室医学研究員、6月にネブラスカ大学医学部病理学教室医学研究員。1984年山口大学医学部助手、1986年京都大学助教授などを経て、1989年3月に熊本大学医学部教授。アイソトープ総合センター長、エイズ学研究センター長、医学部長、大学院医学教育部長などを歴任。2011年4月より2期、理事・副学長を務め、2015年4月、熊本大学長に就任。専門分野は感染防御学。

新学長が語る これからの 熊本大学

理想の大学を目指し ルビコン川は渡った

理想とする熊本大学像を胸に

今後6年間、熊本大学の舵を取っていくにあたり、本学の理想像を描いておきたいと思えます。私は2011年から4年間、研究・社会連携担当理事を務めました。当時から大学とはどうあるべきなのか、理想の大学像とは何かを考えていました。その中で達した結論は、熊本大学は研究拠点大学であるべき、というものです。

医学部教授時代に、当時の医学部長から聞いた言葉を大変印象的に覚えています。それは、「熊大医学部は単なる医者養成所ではない。しっかりとした研究に裏打ちされた優れた医者を育てる場所だ。だから研究は大切なのだ」というものでした。本学医学部には、高いレベルの研究をバックグラウンドとして、質の高い教育を行うことを理想とする伝統が

連続してあります。そしてそれは、全学的にもいえることです。この理想像は、学長の任に就いても、持ち続けたいと思っています。

将来の大学連携も視野に

また、長期的視野で大学の在り方を考えるとき、大学連携ということも考えるべきでしょう。九州は、将来、道州制の導入によって一つにまとまるかもしれません。その際は九州の国立大学が連携した上で、それぞれの特徴となる部分を伸ばしていくという形態になる可能性があります。

例えば、アメリカのUCSF(カリフォルニア大学サンフランシスコ校)は、主に医学系を専門にした大学院大学であり、整った研究環境の下に、世界中から優秀な人材が集まっています。本学も、いずれは何かしらの専門性

を持った大学院大学となることを目指せるよう、現在持っている強みを拠点として伸ばしていくべきではないでしょうか。

「研究大学強化促進事業」で研究力アップ

そのような中、世界水準の研究活動を行う大学としての機能強化を図っていくことを目的とする文部科学省の「研究大学強化促進事業」に、本学が採択されたことには大きな意義があるといえます。

本学では、研究活動強化を目指して、昨年度、医学系と自然科学系の研究拠点施設を相次いで創設しました。本学には、医学系ではエイズ学や発生医学における先進的な研究があり、一方、自然科学系に目を向けると、KUMADYAMAGネシウム合金やパルスパワー研究といった本学独特のユニークな研究

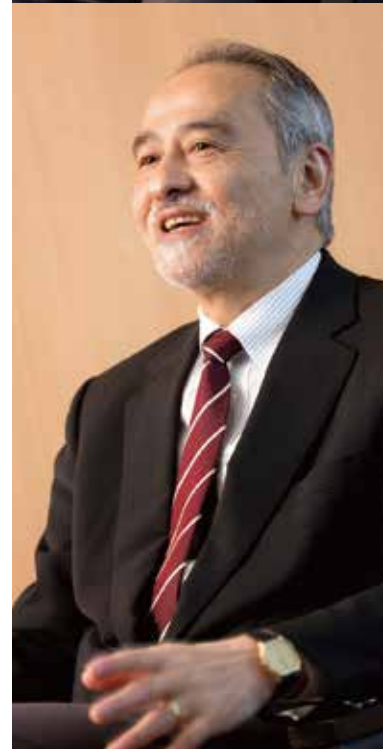
分野があります。

また、人文社会系においても、「永青文庫」研究や、インスタラクション・デザインに基づくeラーニングの専門家養成を目指す「教授システム学」など、熊大ならではの取り組みが行われています。これら、オンラインの拠点を育てていくことによって、本学の価値を高め、本学全体の研究力を上げることができるよう。『研究大学強化促進事業』は9ページ参照

真にグローバルな大学を目指すSGU

また、研究力の強化とともに重要なのが、学部教育の充実です。そのためには、同じく本学が採択された「スーパーグローバル大学創成支援」事業(SGU)と、「地(知)の拠点整備事業」(COC)における取り組みを、学部教育の改革に最大限に生かしていく必要があります。

SGUは、我が国の高等教育の国際競争力の向上を目的とした文部科学省の事業で、本学にはグローバルな大学として、国際化を牽引する役割が求められています。真にグローバルな大学になるためには、研究拠点としてはもちろんのこと、学部教育の国際化が必須です。本学ではこれから、とりわけ教養教育の国際化を図っていきたくと考えています。入学時期の見直しやクォーター制を取り入れるなどし、単位互換も柔軟に行い、本学



の学生が海外へ、また、海外の学生が本学へと、自由に行き来できるようなシステムを早期に構築しなければなりません。[SGUは7ページ参照]

地域に学び人材を育成するCOC

一方、COCは、大学が地域社会と連携し、地域コミュニティーの中核的存在としての機能強化を図ることを目的とした事業であり、本学は地域に根差した大学として、地域に学び、創造力を持って問題解決ができる人材の育成を目指しています。学生には、教養教育の課程で、地域の課題をしっかりと学んでもらい、地域貢献の認識を高めてもらいたい。

その足掛かりとして、新入生を対象に、地域の歴史や文化、現在の状況を理解するための「熊本学(仮称)」を開講するなど、地域志向カリキュラムの充実化を図っていくつもりです。[COCは10ページ参照]

教養教育を含むこれからの学部教育は、各学部で国際化を図る教育を取り入れるとともに、熊大ならではの特徴ある教育カリキュラムに改変していくことが進むべき道で

しょう。その改変の大きな力となるのが、SGU、COCです。また、「研究大学強化促進事業」によって、研究拠点大学としての大きな躍進も期待できます。今後、本学の姿は大きく変わっていくと思います。いえ、むしろ、変わらなければならないのです。この変革期にあたって、これら三つの事業採択を勝ち得たことは、非常に大きなことです。熊本大学は、変革へのルビコン川をすでに渡ったのです。

変革していく熊本大学

国際化を目指すSGUと、地域志向のCOC。一見相反する双方の事業に採択され

たことで、果たして両立できるのかという声を聞くことがありますが、私は十分に可能だと思っています。熊本という地域にある大学としての特色を最大限に生かして、世界に向け発信できる大学を目指せば良いのです。

私は熊本出身であり、大学院修了までこの地で過ごしました。地域のことをよく知っており、関係も深い。地域活性化に力を注ぎたいの思いは強く持っています。研究拠点大学として、世界に目を向けて研究拠点の強化を図っていくのはもちろんのこと、地域に根差した大学として、地域の課題に真摯に取り組み、地域の核となる大学たりえるこ

とも大切にしたいと考えています。

学長就任1年目となる今年度は、本学の将来構想策定と並行して、「第3期中期目標・中期計画」を打ち立て、翌2016年度からの「アクションプラン」を策定するという大仕事が待っています。2004年の国立大学の法人化に伴い各大学に義務付けられた「中期目標・中期計画」の策定は、第3期を迎え、より具体的な数値目標が課されることが見込まれます。各大学には具体的な変革が求められているのです。熊本大学もまた然り。これから大きく変革していく熊本大学に、期待してください。

熊本大学理事・副学長 (2015年度)



野口 敏夫
理事(法務担当)
(非常勤)



古島 幹雄
理事(教育・学生支援担当)
副学長



高島 和希
副学長(国際交流担当)



松本 泰道
理事(研究・社会連携担当)
副学長



山縣 ゆり子
副学長(男女共同参画担当)



山崎 広道
理事(人事・労務担当)
副学長



水田 博志
副学長(病院経営担当)
医学部附属病院長



竹屋 元裕
理事(目標・計画・評価担当)
副学長



西川 泉
理事(財務・施設担当)

これからの熊大を創る三つの核

原田新学長体制の下、これからの熊本大学を創っていく核となるのが、本学が採択された文部科学省の三つの事業、すなわち「スーパーグローバル大学創成支援」事業（SGU）、「研究大学強化促進事業」、「地（知）の拠点整備事業」（COC）です。ここからは、これらの事業に対する本学の取り組みと、それによって期待される成果について特集します。

国際競争力を強化し 地域を牽引

「地域と世界をつなぐグローバル大学Kumamoto」

事業期間 / 2014～2023年度

地域の国際化を牽引し 地域に貢献する大学として

「スーパーグローバル大学創成支援」事業（SGU）は、日本の高等教育の国際競争力の向上を目的に、海外の卓越した大学との連携や大学改革により徹底した国際化を進める大学に対して重点的な支援が行われるもので、文部科学省によって2014年度に開始された事業です。申請した104大学の中から、世界的レベルの教育研究を行う「トップ型」（タイプA）13校と、国際化を牽引する「グローバル化牽引型」（タイプB）24校の計37校が選ばれ、熊本大学は「タイプB」に採択されました。

本学は構想名に「地域と世界をつなぐグローバル大学Kumamoto」を掲げています。今後、地域の国際化を牽引するとともに、世界レベルの研究拠点大学として地域に貢献していくことを目指し、教育システム互換性の向上や留学生への日本語・日本文化教育の充実などを行います。

【表1】SGUで目指す10年後の姿

	2013年度	→	2023年度
外国人留学生	764人 (7.6%)		1,600人 (16%)
日本人留学経験者	541人 (5.8%)		1,200人 (14%)
外国人教員および日本人教員の海外経験者※	348人 (33.4%)		770人 (73%)
女性教員	182人 (17.4%)		250人 (24%)
外国語による授業科目	367科目 (6.1%)		1,070科目 (17%)
外国語力基準を満たす学生 (TOEFL iBT80)	163人 (1.6%)		1,150人 (12%)
シラバスを英語化している授業科目の割合	2016年度に 100%を目指す		
外国語力基準を目指す事務職員	26人 (4.3%)		68人 (11%)

※外国の大学で学位を取得した日本人教員および外国で通算1年以上の教育研究歴のある日本人教員

(SGU構想調書より作成)

国際化を進めるための 制度見直しと新組織設置

具体的には、海外の学事暦に対応した入学期の見直しや、大学院への早期入学、海

外留学の期間確保と柔軟な単位互換など、国際通用性の高い学部教育システムの導入を図ります。2015年3月1日には、本学の国際化を推進する組織として「グローバル



(SGU構想調書より抜粋)

熊本大学の特性を踏まえた特徴ある取り組みの概念図(SGU)

SGUへの申請にあたり国に提出した構想調書では、本学が10年後に達成すべき具体的な数値目標を掲げています(表1)。これらの成果指標を基に、地域と日本の国際化を牽引する真のグローバル大学を目指し、教育内容や教育環境の国際化に取り組んでいきます。

教育カレッジ」を新設。当カレッジの中に「グローバル人材教育センター」、「日本語・日本文化教育センター」、「オープン教育センター」の3センターを設置しました。これらの組織が中心となって、英語による教養科目の提供や、日本文化を世界に広める役割を担う留学生に対して、より質の高い教育の提供などを行います。

特に、「オープン教育センター」が中心となって実施する「熊大グローバルYouthキャン

パス」事業では、留学生と熊大生が一緒に過ごすサマースクールや、熊大協定校への海外研修プログラムを通して、地域の中・高校生や高専生に対して、早期のグローバル教育の機会を提供します。

本学ならではの特徴を生かし、真のグローバル大学を目指す

本学には、KUMADAMAGネシウム合金やパルスパワー研究、発生医学、エイズ学の研究

など、世界の先端をいく研究分野があります。また、地域に根差した大学として、これまでも地域から国際社会で活躍する人材を輩出する役割を担ってきました。「地域と世界をつなぐグローバル大学Kumamoto」構想は、本学の強みを生かしつつ国際化を推進することにより、熊本の良い世界に発信し、国際社会で存在感のある地域と大学を目指していくもので、地域の中核となる他の大学が、グローバル化に取り組む際のモデルになり得ます。

SGU News

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」熊本大学キックオフシンポジウム開催

1月31日(土)、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」熊本大学キックオフシンポジウムが、工学部百周年記念館において開催されました。当日は本学の教職員・学生をはじめ、学外の教育関係者、高校生、一般参加者など約230人もの参加があり、会場は熱気で包まれました。

シンポジウムは、文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長松本英登氏のあいさつに始まり、本学と同じくSGUの「タイプB」に採択された、国際教養大学、上智大学、立命館アジア太平洋大学の学長ら

がそれぞれの取り組みについて講演。続いて、5年一貫制の博士課程を置く大学院大学として、学際的で先端的な研究を行う沖縄科学技術大学院大学のジョージ・岩間氏と、大学と連携して国際化に取り組む熊本県の小野泰輔副知事が講演を行い、本学のさらなる国際化に対する期待を寄せました。

最後は本学の谷口功学長(当時)が登場。本学の指標と設定目標を示しながら、「10年後も輝き世界に羽ばたく熊本大学」を目指す意気込みを語り、シンポジウムは盛会のうちに幕を閉じました。



文部科学省「研究大学強化促進事業」熊本大学
～世界的に評価される先進的な研究を推進強化～

生命科学、自然科学、人文社会科学の3分野に組織する国際共同研究拠点において、優れた研究者を擁護し、それらの教員を支援するURAを配置する。このことにより、研究の国際性を中心として研究力の強化を図り、世界的にも先進的な研究を推進し、特色ある基盤的研究を強化。



研究大学強化促進事業内容

熊本大学における「研究大学強化促進事業」の内容

国際水準の研究力強化を目指す
三つの分野で研究拠点を整備

「研究大学強化促進事業」は、世界水準の優れた研究活動を行う大学群を増強し、日本全体の研究力の強化を図るため、大学などによる研究マネジメント人材群の確保や集中的な研究環境改革などの、研究力強化の取り組みを支援することを目的としています。この事業には本学を含む22の大学・機関(国立大学17、私立大学2、研究機関3)が選ばれました。

本学では、「研究推進実施体制の一元化の実現」「研究の国際化をさらに進めるための国際共同研究の推進と環境整備」「戦略性に富んだ教員人事の実施」「URA(※「研究大学強化促進事業」(News参照)人材の育成と確保」「研究の効率を上げるための研究支援体制の強化」の5つの目標に取り組んでいます。

生命科学、自然科学の3分野にお

世界水準を目指し
研究機能を強化

事業期間/2013~2022年度

国際共同研究拠点を組織。学内の優れた研究者から成り、彼らを支援するURAを配置しました。このような取り組みによって、研究力の強化を図り、世界的に見ても先端的な研究を推進し、本学らしい特色のある基盤的研究を強化していくこととされています。

2014年度には、生命科学および自然科学分野の研究施設が相次いで竣工。発生医学やエイズ学などで優れた研究成果を持つ生命科学分野では、本荘・九品寺キャンパスに「国際先端医学研究拠点施設」が完成しました。ここでは、研究者同士がコミュニケーションを取りやすいオープンラボ形式を取り入れ、研究室内では原則として英語を使用するなど、国際的な研究を推進できる環境を整備。研究者を広く国際的に公募し、優秀な人材の確保に努めています。

また、自然科学分野の研究施設としては「国際先端科学技術研究拠点施設」が黒髪南キャンパスにオープン。国際的に注目を浴びているKUMADAMAGネシウム合金やパルスパワー研究などに携わる本学の教員を中心に、国内外の研究者が共同で先端的な研究を行っています。生命科学分野においては、2015年4月に、本学の生命科学分野の

国際共同研究拠点を組織。学内の優れた研究者から成り、彼らを支援するURAを配置しました。このような取り組みによって、研究力の強化を図り、世界的に見ても先端的な研究を推進し、本学らしい特色のある基盤的研究を強化していくこととされています。

2014年度には、生命科学および自然科学分野の研究施設が相次いで竣工。発生医学やエイズ学などで優れた研究成果を持つ生命科学分野では、本荘・九品寺キャンパスに「国際先端医学研究拠点施設」が完成しました。ここでは、研究者同士がコミュニケーションを取りやすいオープンラボ形式を取り入れ、研究室内では原則として英語を使用するなど、国際的な研究を推進できる環境を整備。研究者を広く国際的に公募し、優秀な人材の確保に努めています。

また、自然科学分野の研究施設としては「国際先端科学技術研究拠点施設」が黒髪南キャンパスにオープン。国際的に注目を浴びているKUMADAMAGネシウム合金やパルスパワー研究などに携わる本学の教員を中心に、国内外の研究者が共同で先端的な研究を行っています。生命科学分野においては、2015年4月に、本学の生命科学分野の

国際共同研究拠点を組織。学内の優れた研究者から成り、彼らを支援するURAを配置しました。このような取り組みによって、研究力の強化を図り、世界的に見ても先端的な研究を推進し、本学らしい特色のある基盤的研究を強化していくこととされています。

2014年度には、生命科学および自然科学分野の研究施設が相次いで竣工。発生医学やエイズ学などで優れた研究成果を持つ生命科学分野では、本荘・九品寺キャンパスに「国際先端医学研究拠点施設」が完成しました。ここでは、研究者同士がコミュニケーションを取りやすいオープンラボ形式を取り入れ、研究室内では原則として英語を使用するなど、国際的な研究を推進できる環境を整備。研究者を広く国際的に公募し、優秀な人材の確保に努めています。

また、自然科学分野の研究施設としては「国際先端科学技術研究拠点施設」が黒髪南キャンパスにオープン。国際的に注目を浴びているKUMADAMAGネシウム合金やパルスパワー研究などに携わる本学の教員を中心に、国内外の研究者が共同で先端的な研究を行っています。生命科学分野においては、2015年4月に、本学の生命科学分野の

「研究大学強化促進事業」News

科学について気軽に語ろう

熊本大学サイエンスカフェ

URA (University Research Administrator) とは、大学において、研究者と共に研究活動を円滑に行うための業務を行う専門職。その活動の一つに「サイエンスコミュニケーション」があります。昨今、一般市民の科学への興味関心が高まり、科学者との対話の機会が望まれるようになりました。そこで、URAが主催となって企画するのが「熊本大学サイエンスカフェ」です。

「サイエンスカフェ」とは、科学者と一般市民とが飲み物を片手に気軽に科学の話題について語り合う、新しいコミュニケーション

の場。今年2月には、第1回目の「サイエンスカフェ」が「着られる機械(キカイ)・広がる世界(セカイ)」というテーマで開催されました。

本学と京都大学の研究者が、ウェアラブルデバイスと呼ばれる装置を用いて「てんかん」の発作予知を行う研究について紹介。参加者は小学生から主婦、会社員までさまざまでしたが、実際に装置を用いての分かりやすい説明に、全員が楽しく、熱心に学ぶ様子が見られ、活発なサイエンスコミュニケーションが行われました。「サイエンスカフェ」は今後も随時開催されます。



研究を戦略的に統括する「国際先端医学研究機構」を設置しました。

本事業に採択されたことを契機に、本学が元来強みとしてきた研究分野をよりいっそう強化し、今後さらに、国際的な研究拠点大学を目指す取り組みを進めていきます。

COC

地(知)の
拠点整備事業

地域社会に貢献する 人材を育成

「活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成事業」

事業期間 / 2014~2018年度

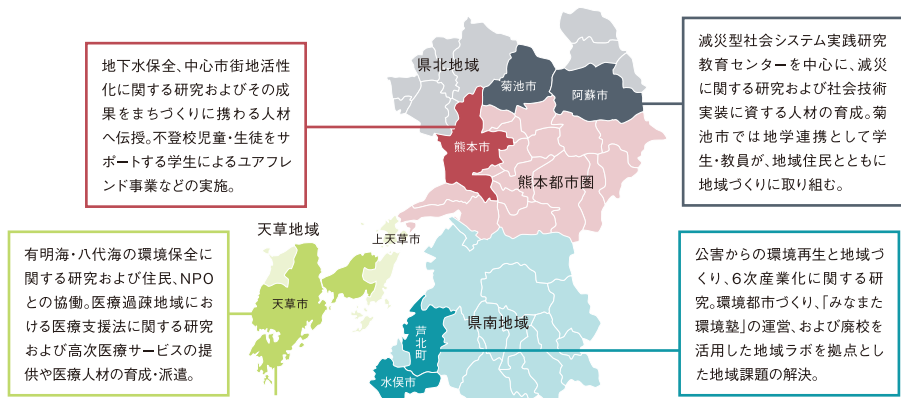
地域から学び、自ら考え、行動する人材を育成

「地(知)の拠点整備事業」には、全国から国公私立25件が採択され、熊本県内からは本学と熊本県立大学が選ばれました。本学の事業名は「活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成事業」。地域に学び、創造力をもって問題解決に挑戦し、世界規模で社会貢献できる人材を育成するため、2014年12月に「地域創生推進機構」を立ち上げ、本学の関係機関と連携しながら教育プログラムの改革に取り組んでいます。

教育プログラムでは、新入生を対象にした「熊本学(仮称)」を開講し、地域の歴史や文

化、現在の状況を理解することにより、地域を学ぶ動機づけとします(STEP1)。

そして、社会人講師や本学教員から地域の具体的課題を学んだ上で(STEP2)、インターシッピングなどの形で実際に地域に入り、地域の課題解決に取り組みます(STEP3)。



COC事業で取り組む研究、社会貢献

【表2】平成26年度のプロジェクト

プロジェクト名	所属・代表者	対象地域※
● 教育カリキュラム開発型		
地域のヘルスコミュニケーションPBLの開発	政策創造研究教育センター 河村洋子准教授	A/D
教養科目「熊本学」の教材開発及びeラーニングコンテンツの整備	大学教育機能開発総合研究センター 本間見准教授(内山 忠特任助教)	E
● 地域志向研究型		
古地図、古写真を用いたビジュアルな都市史教育による愛郷心とコミュニティ意識の醸成に関する研究	大学院自然科学研究科(工学系) 伊藤重剛教授	A
菊池市の生活習慣病予防改善に資する保健指導システムの開発・検証	政策創造研究教育センター 都村茂樹教授(天野 慧特任助教)	B
予防的避難行動の阻害要因と促進要因に関する分析	大学院自然科学研究科(工学系) 榎本竜治教授	B
不要材となっている竹材を地域の熱エネルギーとして役立てるプロジェクト	大学院自然科学研究科(工学系) 鳥居修一教授	C
天草の未来を考えるプロジェクト	政策創造研究教育センター 田中尚人准教授	D
地域医療を支える女性医師の離職と復職に関する実態調査および啓発活動	医学部附属病院 池田 学教授	E
未利用天草陶石の有効利用技術の開発	大学院自然科学研究科(工学系) 松田元秀教授	D
● 地域貢献型		
熊本におけるビジネス人材の育成	大学院社会文化科学研究科 教授システム専攻 鈴木克明教授	A
リノベーションラボラトリープロジェクト	工学部附属革新ものづくり教育センターまちなか工房 浦上章志教授	A
熊本県及び熊本県内市町村職消防実務研修会支援事業	大学院自然科学研究科(工学系) 竹内裕希子准教授	E
伝統野菜を活用した農村コミュニティの振興	政策創造研究教育センター 上野真也教授(富吉満之特任准教授)	E
メディア芸術作品制作に向けた水俣地域生活誌の作成	文学部 鈴木寛之准教授	C
「天草ジオパーク」を通じた天草地域の環境保全と地域活性化支援事業	大学院自然科学研究科(理学系) 松田博貴教授	D

※A=熊本都市圏、B=県北地域、C=県南地域、D=天草地域、E=全域

関係機関や住民と連携し、地域が抱える課題を解決する大学へ

この事業では熊本県内の地域を大きく四つに分類し、それぞれに取り組むべきテーマを定めました。熊本都市圏では地下水保全と学都という特色を生かしたまちづくり、県南においては水俣地域の環境再生と農業の6次産業化によるまちづくりをテーマとしています。また、阿蘇を含む県北地域では、減災とグリーンツーリズムを生かしたまちづくり、天草地域では有明海・八代海の環境保全と地域医療のまちづくりに取り組むこととされています。

取り組みにあたっては、県や市町村、経済界、地域住民や企業・団体なども連携し、地域関係機関や住民と連携し、地域が抱える課題を解決する大学への課題(ニーズ)と大学の資源(シーズ)の効果的なマッチングによって地域課題の解決を目指します。平成26年度は、都市部の空ビル利活用による中心市街地活性化事業などへの取り組みが決定されました(表2)。

COCの採択を機に、地域の課題などの認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材を育成するとともに、本学が地域再生・活性化の拠点としてより重要な役割を担う大学となることを目指してまいります。



研究室探訪

Laboratory Exploration

民俗学研究室

文学部

総合人間学科

民俗学とは、人の営みの中における風俗や慣習、しきたり、言い伝えなどの歴史的変遷の過程を明らかにし、そのことによって現代の生活文化を解明しようとする学問です。民俗学研究室では、山下裕作教授と鈴木寛之准教授の指導の下、文献研究とともに、フィールドワークを重視した調査研究を行っています。

「熊大民俗学は、“救世済民”の学である柳田國男の民俗学の流れをくんでいます」。官僚でもあった柳田國男と同じく、農林水産省に勤務した経歴を持つ山下教授は語ります。「民俗学を研究することによって、農村の地域活性化などにつなげていくとともに、自分自身の能力も高めることができる“実用的な民俗学”を目指していることが、この研究室の特徴といえるでしょう」。

学生たちは、時には泊まり込みで農村などの現場に入って実際の暮らしを体験し、住民の方々に聞き取り調査を行うなどします。「徹底したコミュニケーションによって課題を見だし、住民と協働して解決策を探っていきます。このような手法は、農村だけでなくさまざまな場面で通用するはずだと山下教授。

民俗学研究室の調査対象は、地域に伝わる神楽や生業に関するものから湯治文化、就活(就職活動)の歴史、アニメの聖地巡礼までさまざま。多彩なテーマに対応するとともに、学生が実体験を通じて社会を生きる力や技能を高められるよう、研究室ではうどん作りなどの食品加工や環境・生態調査、農業経営調査など、さまざまな実習や研究方法を取り入れています。

「学生たちには、“何を知るか”より“どう育つか”を大切にしてもらいたい。民俗学を学ぶことによって“人間としての技能”を高め、それを生かして社会で活躍できる人になってほしいですね」。

Nov.
22



班単位で現地を歩き、気付いたことを記録。地域住民が知らなかったこと、忘れていたことを発見することもある。

密着！ 民俗学研究室

現地調査は民俗学の基本！
阿蘇郡西原村河原地区での「環境点検ワークショップ」の様子を追いました。

lab's data

【民俗学研究室データ】

□ 研究テーマ

山下裕作教授(左)／応用民俗学、生業研究
鈴木寛之准教授(右)／口頭伝承論
漫画文化研究

民俗学研究室の調査実習報告書「熊民叢書」は、2010年度からこれまで10冊近く刊行。「熊大生の放課後」は、学生生活や大学周辺事情などについてまとめたユニークな一冊。

□ メンバー

山下裕作教授 鈴木寛之准教授、大学院生4人、学部4年生13人、3年生11人、研究生3人

□ OB・OGの進路

熊本県松橋収蔵庫(学芸員)、福井県立博物館(学芸員)、萩博物館(学芸員)、法務省、熊本県庁、佐世保市役所、球磨地域農業協同組合、株式会社熊本県民テレビ、株式会社阿蘇ファームランド、株式会社システムクレオ ほか

Interview:

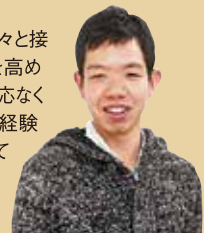
調査実習で得た知識や能力を社会の中で生かしていきたい

文学部総合人間学科地域科学コース
民俗学4年 松田孝介さん

民俗学は幅広い分野を研究の対象としています。どの研究室に所属するかを選択するにあたり、ここでなら自分が最も興味・関心があるテーマを自由に選ぶことができると思い、民俗学研究室に入りました。

昨年度の調査実習では、宮崎県の諸塚村に数日間滞在し、生業や神楽について調べました。この時の、蜂を巣から取り出し、調理し、食べる“蜂料理体験”は強烈でしたが、村の人々にとってはこれも生活文化。さまざまな地域や集落があり、それぞれに習慣や文化を持つことは本や資料に書いてはありますが、実際に体験することで、実感を持った知識として自分の中に蓄えることができたのは有意義であったと思います。

また、聞き取り調査でたくさんの方々と接することで、コミュニケーション能力を高めることもできました。社会に出れば否応なく人と関わります。民俗学研究室での経験は、きっと今後の仕事や生活に生きてくると思います。





民俗学を通して“人間としての技能”を学び 社会で活躍できる人になる！

Nov. 24



完成したマップを基に住民の皆さんへの報告会を開催。学生、住民が互いに意見を出し合い、地域の未来を考えていく。



Nov. 23



調査結果を「現状マップ」に、自分たちが感じた地域の可能性を「将来構想マップ」にまとめる。

まちをつくり、 まちに育てられる

「まちなか工房」
10周年



はやりのファッションの店やカフェ、老舗の和菓子屋、古書店など新旧が混在した雰囲気の魅力の熊本市上通・並木坂商店街。この通りに面したモダンなビルの2階に「まちなか工房」はあります。2015年5月には開設から10周年を迎える「まちなか工房」。これまで果たしてきた役割とその成果、そしてこれからの目標を特集します。

まちづくりを学ぶなら、まちなかで

「まちなか工房」は、2005年、熊本大学が文部科学省の「ものづくり創造融合工学教育事業」に採択されたことを機に設置されました。「工学部のものづくりには、ものそのもの、つまり製品を作る分野と、まぢゃ、人を対象に社会の仕組みをつくっていく分野があります」と話すのは「まちなか工房」の2代目代表を務める溝上章志教授。「まちづくりを学ぶため、実際の研究フィールドである市街地の中に飛び込んで行った研究室が『まちなか工房』です。ここを拠点に、学生や教員がまちづくりをテーマにした研究に取り組んでいます」。

開設から10年。「まちなか工房」は、「研究教育と連動した地域情報の蓄積」、「官民まちづくり組織の連携支援」、「市民のまちづくりに関する学習・交流会の提供」、「地元民間組織のまちづくり活動支援」という四つの理念に基づき、まちづくりに関するさまざまな研究活動を行ってきました。

さまざまな形でまちづくりに関わる

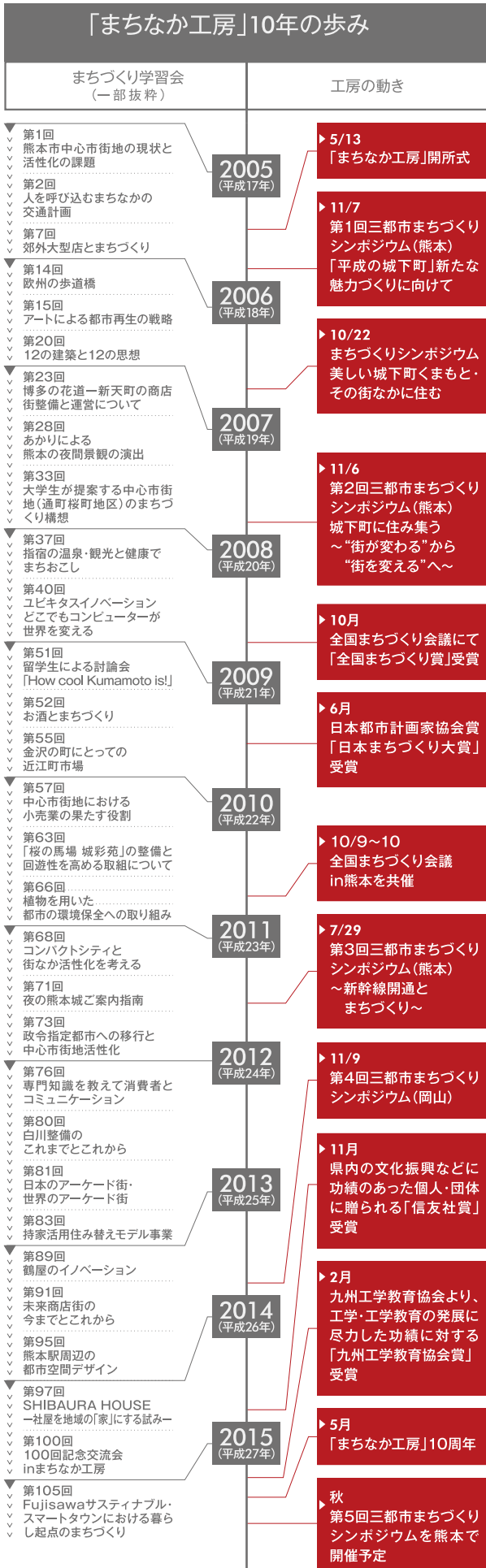
例えば、市街地に活動拠点があるという利点を生かし、歩行者通行量や周辺ビルの床利用状況の定点観測など継続的に実施。まちづくりに活用できる情報として蓄積し

ています。また、熊本市中心商店街などからなる、まちづくりの任意団体「すきたい熊本協議会」の「員」として活動することにも、市の「中心市街地活性化協議会」においては準備段階から参加。学生たちも会議の場で調査結果を発表するなど、積極的に関わっています。

そして、商店街やまちづくりに関心のあ一般の方に、まちづくりに関する学習交流の場を提供しようと開催してきたのが「まちづくり学習会」です。全国からまちづくり活動に積極的に関わり組んでいる方を講師として招いたり、行政職員にまちづくりに関する施策について分かりやすく説明してもらったりなどする学習会を、10年にわたりほぼ毎月1回開催。2014年8月にはついに100回を超えました。

地域に全国に、成果を発信・還元

城下町、新幹線、そして市街地に旧制高等学校のナンバースクールを有するという共通項を持つ熊本・岡山・金沢の三つの都市が連携し、課題解決に向けさまざまな議論を行う「三都市まちづくりシンポジウム」の開催も、「まちなか工房」の活動の成果の一つです。「このシンポジウムは本学の呼び掛けで始まりました。『まちなか工房』の取り組みが、工房だけでなく、工房を支えてくれ



また、今後は、NPO法人などまちづくりのプロがスキルを高めるための講習会の充実や、県内の他の大学と共通で単位が取得できる、まちづくりに関する共同教育プログラムの仕組みづくりにも取り組みたいと語ります。「学生にとって『まちなか工房』

また、今後は、NPO法人などまちづくりのプロがスキルを高めるための講習会の充実や、県内の他の大学と共通で単位が取得できる、まちづくりに関する共同教育プログラムの仕組みづくりにも取り組みたいと語ります。「学生にとって『まちなか工房』



「まちなか工房」代表
大学院自然科学研究科
副工学部長
溝上章志 教授

は、市街地という実際に問題が起きている現場に身を置くことで、自ら課題を発見し、自分なりの解決策を見いだす能力を養える場。『まちなか工房』で学ぶことの意義とその成果を地域に、全国に、さらに発信し、まちづくりに還元していきたいですね」。



1.階段を上ると、12席の研究スペースと、40~50人収容の展示・ゼミスペースを備えた「まちなか工房」がある 2.「まちづくり学習会」の様子。工房の研究発表をすることもある 3.研究室からまちに飛び出して聞き取り調査を行うこともしばしば 4.調査結果を基に作成した歩行者通行量の空間分布分析図。熊本城とまちのつながりの弱さが分かり、どの街路に手を入れればよいかの検討につながる 5.並木坂商店街の「えびす祭り」。工房の学生は商店街のイベントにもボランティアとして積極的に参加しており、商店街にとって強力な助っ人となっている 6.「第3回三都市まちづくりシンポジウム」。200人以上が参加し、各都市の現状や取り組みを紹介。活発な議論が行われた



自ら全てを計画した留学により 交渉力や行動力を学ぶ

大学院自然科学研究科 物質生命化学専攻
博士前期課程1年 内門真之介さん

文部科学省が2014年度に始めた「官民協働海外留学支援制度
～トビタテ!留学JAPAN 日本代表プログラム～」の第一期には
全国から1,700人の応募があり、323人が採用されました。
熊本大学からは8人が採用され、内門真之介さんはその一人です。

交 流



ノッティンガム大学男子ハンドボール部のメンバーとして「University Championship」という大会に出場(後列左から2人目)。

「トビタテ!留学JAPAN 日本代表プログラム」では、留学先の選定から交渉、滞在先に至るまで、全ての留学計画を自ら設計することが求められます。私は、バイオ燃料を効率よく作るための触媒を開発する研究に取り組んでいるので、化学工学の研究が進んでいるイギリスのノッティンガム大学のマイクロウェーブ研究所を留学先に選びました。

しかし、留学当初はトラブル続き。予約していたシェアハウスから突然断られたり、研究に関しても、事前に内容を伝えていたにも関わらず、初日に「あなたのやりたい実験は危険だから許可できない」と言われたり。研究テーマをバイオ燃料の製造プロセスの解明に変更することを余儀なくされ、準備万端で臨んだつもりが思ったように事が運



ハンドボール部の仲間が開いてくれた送別会。「バスが24時間運行なので、みんなと思う存分最後の時を楽しめました」(後列中央)。

ばず、ホームシックになったほどです。ノッティンガム大学は、安全講習を受け、テストにパスしなければ研究や実験もできないほど安全管理に厳しく、危機管理意識の大切さを改めて痛感しました。

私は小学校の頃からハンドボールをしているので、市と大学の二つのチームに加入し、練習や試合を通じてたくさんの友達ができたことが、精神的な支えになりましたね。

プログラムを活用したことによって、対外的な交渉力や目的を実現するための行動力など、得るものが多い3カ月でした。また、海外で心細い経験をしたことで、友人の存在がありがたく、また熊大がいかに学生や留学生に手厚いサポートしているかということも分かりました。将来は大学で学んだことを生かし、人々の暮らしに貢献できる研究を続けたいと思います。

International exchange Report

国際交流レポート
平成26年12月
～平成27年2月

12 / 6 留学生シンポジウムに参加

熊本留学生交流推進会議の主催で留学生と熊本県民の交流を目的として開催され、留学生など約130人が参加しました。

11 第6回学生国際会議(CAST 2014 Clermont Ferrand)をフランスで開催(2日まで)

自然科学研究科主催、学生による運営で、本学から39人、海外から約75人の学生が参加しました。

13 谷口学長が南台科技大学(台湾)の開学45周年記念式典に出席

本学の大学間交流協定校である南台科技大学(台湾)の開学45周年記念式典が同大学で開催され、本学から谷口功学長と国際化推進センターの鳥居修一副センター長が出席しました。

16 熊本大学留学生交流パーティを開催

本学で勉学・研究に励んでいる留学生、その指導教員、チューターおよび学外関係者などの交流と親睦を深める目的で開催し、約350人が参加しました。

1 / 13

在エディンバラ日本国総領事館を本学の派遣団が訪問

28 アテネオ・デ・マニラ大学(フィリピン)副学長が本学を訪問

世界から熊本大学へ

熊大オリジナルの試験装置で鉄鋼材料研究に挑む!

大学院自然科学研究科 産業創造工学専攻
博士後期課程2年 郭 光植(カク クァンシク)さん

鉄鋼材料の構成組織が持つ特性を明らかにすることで新素材の設計開発につなげたいと語る郭光植さん。かつて熊本大学に学び、いったん就職した後再び熊大に戻り研究を続けています。

子どものころは、車や飛行機などの乗り物のデザインや構造にとっても興味がありました。韓国・大田の培材大学校の新素材工学科でセラミックスについて研究した後、2005年に熊本大学の先端材料研究室に留学しました。熊大を選んだ一番の理由は、高島和希教授の研究室で独自に開発された「マイクロ材料試験装置」を使って高度な研究をしたいと思ったからです。この装置は、鉄鋼材料の構成組織から微小な試験片を取り出し、通常の装置では試験することができないようなマイクロメートルサイズの小さな組織を、引っ張ったり、曲げたりすることで微小組織単体での力学特性を評価できる画期的なものです。このような独自の装置まで開発している研究室があることを知り、ぜひ学びたいと思いました。



先端材料研究室で開発された「マイクロ材料試験装置」。これを用いて金属材料の機械的特性を調査している。



初めて熊大に来たころは、日本語をほとんど話せず、落ち込むこともありましたが、話し、自分に負けたくないという思いと仲間のサポートのおかげで、帰りたいとは一度も思いませんでした。熊大で出会った女性と結婚したことも、来て良かったことの一つですね。

研究で忙しい毎日ですが、休日には妻と山登りをするなどして楽しんでいきます。これからも高性能な材料の設計開発の研究を続け、人々の暮らしが豊かであり、世の中へ貢献したいと思っています。

2009年に大学院を修了し、日本の企業に就職。自動車のペーシングなどの製造に携わっていましたが、そこで出会ったのが「マルテンサイト」でした。マルテンサイト組織は硬い反面、非常に脆く脆性破壊を起こしやすいという欠点を持っています。ところが微細な構成組織ではその概念を打ち破るようなよく伸びる特性を持つことが報告されています。その面白さに引かれ、2013年、再び高島研究室に戻って主にマルテンサイトを研究しています。



スペインのビルバオで開催された「ICOMAT 2014」に参加し、「ラスマルテンサイトの階層的微視組織のマイクロ引張試験」というテーマで発表を行った。

20 日本語研修コース修了式および短期留学プログラム開講式を実施

19 南京師範大学(中国)表敬訪問(22日まで)
登田龍彦教育学部長が南京師範大学(中国)を表敬訪問し、近く締結される大学間学術交流及び学生交流協定に関する協議を行ったほか、国際文化教育学院および教育学科学院などのキャンパスを視察しました。



17 留学生実地見学旅行を実施(18日まで)
本学留学生が、鹿児島県と水俣市を訪問し、日本の歴史、文化、風土および日本の現在の科学技術などを実際に体験し学ぶことで日本への理解を深めました。



16 パテイン大学(ミャンマー)と部局間交流協定を締結
パテイン大学(ミャンマー)のニューペ学長を本学にお招きし、同大学と本学工学部、理学部および自然科学研究科との部局間交流協定の調印式を行いました。



2 / 3 南栄科技大学(台湾)との交流会を開催
教育学部の部局間交流協定校である南栄科技大学(台湾)の学生たちが本学を訪問し、交流会が開催されました。教育学部長表敬のほか、模擬授業、五高記念館見学および邦楽部の演奏会などを行いました。



法

日本人とハワイの架け橋に！ 秘書兼翻訳者として奮闘中



長岡 南帆

Minaho NAGAOKA

Damon Key弁護士事務所
(アメリカ合衆国) 勤務

法学部法学科・平成24年度卒

平成元年生まれ、熊本県熊本市出身。熊本県立済々養々高校卒業、ハワイ在住。週末はハイキングやトレッキングをしたりビーチで読書を楽しんでいます。

熊大のココがイイ!

やりたいことを
実現できる環境と
質の高い
充実した授業!

大学生活への期待でいっぱい!
好奇心旺盛な高校生

大学生になったらとにかくいろんなことを知りたいと思っていました。見たことのない世界を見てみたい、知らないことをたくさん学びたいと夢見ていましたが、それを将来の仕事に生かしたいなど、立派な考えがあったわけではなく、興味関心があるものをただただ追い掛けたと思っていました。

アメリカ留学も実現した
学ぶ楽しさを実感した大学時代

大学のゼミでは意識の高い学友に恵まれ、充実した学びの日々を送れました。入学当初から留学を希望しており、担任の先生も快諾して下さったことから、一年間のアメリカ留学が実現。帰国後も先生は一年遅れとなった私のためにとても熱心にご指導して下さりました。すてきな環境に恵まれ、学ぶ楽しさを実感できた学生生活でした。

法律の面白さを諦めきれず
ハワイの法律事務所で試行錯誤中

アメリカで就職することになりましたが、大学時代に見いだした法律の面白さを諦めきれず、ハワイの法律事務所に秘書兼翻訳者として勤めています。アメリカ人弁護士と日本人クライアント間の通訳・翻訳が主な仕事です。アメリカ法は知らないことだらけ。日本人とハワイの架け橋になれるよう日々試行錯誤しています。

卒業生 ジャーナル

Graduates' Journal

本学の卒業生たちの“今”に迫る
「卒業生ジャーナル」。
熊本県内はもとより、国内外で活躍する
先輩たちのこれまでの歩みや苦勞、
そして喜び、楽しみなどを通して
精励するその姿をご紹介します。

工

組込みソフトウェアを開発中 “モノを動かす”のは面白い!



眞島 智久

Tomohisa MASHIMA

三菱電機
エンジニアリング株式会社
長崎事業所 勤務

工学部数理情報システム工学科・平成20年度卒/大学院自然科学研究科博士前期課程・平成22年度修了

昭和61年生まれ、佐賀県佐賀市出身。佐賀県立佐賀西高校卒業。趣味はカメラとオーディオ。「製品開発プロジェクトに関わる人全員が幸せになる方法」を探るべく、技術とマネジメントについて勉強中。

熊大のココがイイ!

教育と研究の
バランスがよく、
落ち着いた環境で
成長できる場所。

映像作品を作ることに
夢中だった高校時代

高校では放送部に所属しており、映像作品を作ることに夢中でした。特に毎年開催される「NHK杯高校放送コンテスト」の作品締め切り前は、授業そっちのけで昼も夜もそのことばかり考えていました。映像制作に関わる仕事への興味がある一方、パソコンや音響分野への興味もあり、確固とした夢といえるものはありませんでした。

良い緊張感の中で送った研究生活
海外での学会発表は得難い経験

映画研究部や写真部などのサークル活動の傍ら、家庭教師やブライダル映像制作のアルバイトに明け暮れていました。研究室配属後の3年間は環境に恵まれ、良い緊張感の中で研究中心の生活を送ることができました。研究室在籍中、何度か海外の学会で発表できたことは、特に得難い経験でした。

幅広い分野の案件を担当
仕事に、家庭に、充実した日々

組込みソフトウェアを開発する部署に所属しています。当初は慣れない回路図やマイコン仕様書に苦戦しましたが、“モノを動かす面白さ”に目覚めました。今は、映像機器やWeb、タブレットといった幅広い分野の案件を担当し、刺激的な会社生活を送っています。最近長男が生まれ、1カ月ほど育児を取るなど育児にも奮闘しています。

理

文系クラスから理学部へ 数学教師と物理学研究を両立



山本 拓生

Takuo YAMAMOTO

徳山工業高等専門学校
(山口) 勤務

理学部物理科学科・平成18年度卒/大学院自然科学研究科博士後期課程・平成23年度修了

昭和58年生まれ、鳥取県鳥取市出身。山口県立防府高校卒業。趣味は始めて5年目のピアノと読書、川沿いの散歩。自然の真理を解き明かすことと、徳山高専を日本一の高専にすることが夢。

熊大のココがイイ!

豊かな自然に囲まれ、
おいしい定食屋が
数多く存在する
恵まれた立地。

一念発起! 大の苦手だった
物理と数学を得意科目に

高校時代は文系クラスで、物理も数学も大の苦手でした。あまりにも苦手なので一念発起して一から学び直してみると存外面白く、いつの間にか得意になっていました。高校3年の時には、一般向けに書かれた物理学や数学の本を多く読み、いつしか物理学者になるのが夢になっていました。

好きな学問をとことん追求でき
自己鍛錬の場ともなった大学

学部時代は図書館や物理学・数学科の書庫で一日中、本を読んで計算したり、考え事をしたりしていました。大学院に進学してからはただ勉強するだけでなく、結果を出すために論文を書かねばならず、大変苦勞したのを覚えています。私にとって大学とは「好きな学問や問題を心ゆくまで追究できる夢のような場所」であるとともに、「つらい自己鍛錬の場」でもありました。

物理学の研究を楽しみながら
数学教員として働く

博士課程在学中から熊本高専で非常勤講師をしていたこともあり、現在は山口県の徳山高専で数学教員として勤務しています。高専では講義なども行いつつ、熊大時代と同様に物理学の研究も行っています。日々の業務は大変ですが、夢でもあった研究生活を楽しみながら続けていきたいと思っています。



日々更新される情報を読み解き お客様にお伝えする仕事



下川 亜季子

Akiko SHIMOKAWA

株式会社進研アド(東京)
勤務

文学部文学科・平成11年度卒

昭和52年生まれ、鹿児島県薩摩川
内市出身。鹿児島県立川内高校卒業。
趣味はバイク。

熊大のココがイイ!

教職員・先輩との
距離が近い!
一生モノの友人が
できました!

本が大好き!

本や文字に関わる道への思い

小さいころから読書が好きで、本の世界にどっぷり浸かりたいと文学部を選択しました。高校のころは、図書館司書や新聞記者、出版社の編集、広告代理店、制作会社のコピーライターなど、本や文字に関わる仕事に就けたらいいなと思っていました。

興味あることには何にでもトライ!

勉学も趣味も友達との時間も全部充実

大学では、興味のあることは何でもやろう!と決めていました。アルバイトや旅行、資格取得、バイクでの九州一周。友人の家で食材を持ち寄って鍋を作ったり、一晩中たわいもない話をして過ごしたり。4年になってからは卒業論文作成のため研究室で過ごすことが増え、先輩方や教授の知見が深く、面白かったことを覚えています。

今の仕事にも生きる

大学で学んだ文献検索手法や分析法

教育関係の広告代理店で6年ほど営業をした後、異動し、マーケティング情報の収集と分析の業務に携わっています。日々更新される情報を、どう読み解いて顧客に伝えるかに悩む日々です。もともと人前で話すことが苦手なのですが、分析報告書をお客様にお伝えする今の業務に就いて、かなり鍛えられました。大学で学んだ文献を探す手法や分析法は今の仕事にも通じています。



予測困難な時代を生き抜く 高度な“考え”を持つ子を育てたい



内田 有亮

Yusuke UCHIDA

熊本大学大学院
教育学研究科 在学

教育学部中学校教員養成課程・平成7年度卒/大学院教育学研究科
教科教育実践専攻・平成26年度修了予定

昭和48年生まれ、熊本県本渡市(現
天草市)出身。熊本県立天草高校卒業。
仕事に追われ、なかなか趣味を見
つけられないのが悩み。

熊大のココがイイ!

目的が決まると
がむしやりに進む
一致団結したパワー。

家族や恩師の影響を受け
徐々に教師の道へ

高校生のころは、漠然と文系の大学に行けたらと思っていました。小学校の教員をしていた父の影響や、中学時代の技術の先生がとても楽しい授業をしてくださったことから、教職もいいなと思っていましたが、具体的に考えたのは、高校3年の時です。

研究を通して多くの

貴重な経験をした大学時代

大学では、研究の指針を示してもらった後は、自分で探求していくスタイルをとらせてもらえたおかげで、研究成果を学会で発表したり、いろいろな大学の先生方から評価を受けて論文集に載せるなどの貴重な経験をすることができました。これらのことは、今後の自分の生き方にも良い影響を与えてくれると思います。

大学院での学びで得た知見と視野で

“考え方”を鍛えられる教師を目指す

平成8年から17年間、中学校で教鞭を執った後、2年前から現職派遣制度を利用して熊本大学院で学んでいます。この学びを通して以前より大きな視野で物事を捉えることができるようになったと思い、感謝しています。予測困難といわれるこれからの時代には高度な思考力・判断力が必要。現場に戻ったら“考え方”を鍛えることができる先生になりたいと思っています。



効果的で副作用の少ない 治療法・医薬品を目指して



小松 賢生

Kensel KOMATSU

ジョージア州立大学
生物医学研究所
(アメリカ合衆国) 勤務

薬学部薬科学科・平成17年度卒/大
学院薬学教育部分子機能薬学専攻
博士前期課程・平成19年度修了/大
学院薬学教育部博士後期課程・平成
22年度修了

昭和58年生まれ、宮崎県日向市出
身。宮崎県立日向高校卒業。将来の
夢は自分の研究を応用した、新たな
治療法・医薬品を世に送り出すこと。
趣味はジャズ音楽鑑賞、名所巡り、
料理。

熊大のココがイイ!

美しい自然に囲まれ、
先生や仲間との絆が
深められる
アットホームな雰囲気。

基礎研究の大切さを知り

研究者の道を志す

幼少期、親身になって風邪や中耳炎を治療してくださった医師に憧れ、困っている人を笑顔にできる医療関係の仕事に携わりたいと考えていました。高校時代には大学・大学院での恩師となる教授と出会い、難治性疾患の治療薬を創るための基礎研究の大切さを実感。好きな科学や数学、英語も生かせる研究者の道へ進もうと決めました。

先生方や仲間たちに恵まれ

充実した日々を送った熊薬時代

学部生時代は、レベルの高い講義や親友たちの積極的な姿勢・人柄に感銘を受ける毎日。研究室配属後も常に温かくサポートしてくださる恩師・先輩方や後輩たち、苦楽を共にした大切な同期の仲間たちに恵まれました。熊薬やアメリカ留学で得たたくさんの思い出は、今でも私の宝物です。

アメリカの大学の研究機関で

新たな治療法・医薬品開発に取り組む

現在、長年の共同研究先であるアメリカの研究所で、中耳炎や呼吸器疾患の研究に携わっています。基礎研究の厳しさ、楽しさを味わうとともに、多くの研究者・専門家との交流によりさまざまな視点から物事を捉えることの重要性を実感しています。効果的で副作用の少ない治療法・医薬品の開発に貢献していきたいです。



病院の検査技師として 病と闘う方々をサポート



元吉 多佳奈

Takana MOTOYOSHI

社会医療法人社団高野会
高野病院(熊本) 勤務

医学部保健学科・平成23年度卒

昭和62年生まれ、熊本県熊本市出
身。熊本県立済々黌高校卒業。趣味
は音楽鑑賞、読書など。

熊大のココがイイ!

縦のつながりが
強いところ。

病気の方々に貢献したいと

医療系の職業に憧れる

高校時代は医療系の職業に憧れを持ち、病と闘っている方々のサポートができたらいいなと考えていました。最も多岐にわたり患者さんのサポートを行えるのが医師だと考え、医学部医学科に行くことを目指して勉強に励みました。2回医学科受験にチャレンジしましたが、力が及ばず断念。臨床検査技師の道へ進むことに決めました。

趣味の音楽活動を通して

視野を広げた大学時代

勉強はもちろんのこと、趣味のバイオリンにも打ち込みました。部活はアンサンブル部に所属し、一般のオーケストラにも入団。毎日のように楽器を練習し、あっという間に時間が過ぎていきました。音楽活動を通じて、幅広い世代のいろいろな職種の方々と出会い、とても狭かった自分の視野を広げることができたと思います。音楽と共にあった、充実した大学生活でした。

検査技師としてさらなる向上

細胞検査士を目指す

卒業後は、高野病院で検査技師として働いています。血液検査、一般検査、生理検査など、幅広く検査を行っています。その中で、今一番力を入れているのが細胞診検査です。その専門資格である細胞検査士を目指し、受験勉強に励んでいます。

REPORT

「地(知)の拠点整備事業」
キックオフシンポジウムを開催

3月1日(日)、工学部百周年記念館にて、昨年度採択された文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」(本学における事業名:「活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成事業」)のキックオフシンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、県下で同事業に取り組む熊本県立大学との共催により実施したもので、県内の自治体や大学関係者をはじめ、地域企業、一般市民など多数の方々が参加しました。

来賓あいさつでは、柳田誠喜熊本県企画振興部政策審議監(当時)から、本県の人材育成と地域課題解決に関して事業への期待が寄せられま

した。その後、東大阪ブランド推進機構理事長の安川昭雄氏が「1本のネジからロケットまで～技術をつむぐ、未来へつなぐもの創り～」と題して講演。東大阪での地域活性化に向けた大学との連携事例の紹介と、大学が地域の課題の解決に貢献していくことの重要性が語られました。

両大学学長によるパネルディスカッションでは、地域を志向した大学の教育・研究・社会貢献の推進と、地域課題を解決できる人材の育成の重要性について、活発な意見が交わされました。



(上)講演する安川昭雄氏(左)パネルディスカッションの様子。左から、谷口学長(当時)、古賀実熊本県立大学学長

REPORT

国際先端医学研究拠点施設
キックオフシンポジウムを開催

1月15日(木)、熊本大学国際先端医学研究拠点施設(IRCMS)は、くまもと県民交流館パレア(熊本市)において「Connecting Scientists across Borders and Disciplines」をテーマとするキックオフシンポジウムを開催しました。

当日は、若手研究者を含む約150人が参加。谷口功学長(当時)のあいさつ後、オックスフォード大学、サウザンプトン大学、インペリアルカレッジ(イギリス)、シンガポール国立大学、KAIST(韓国)などから招いた世界第一線で活躍する研究者により、造血、エイズ、がんなどさ

まざまな研究領域に関する講演があり、活発な質疑応答が行われました。

IRCMSは、須田年生教授を施設長として、2014年4月、本荘・九品寺キャンパスに開設されました。今後本学では、同施設を拠点として、海外の研究機関などに所属する優秀な研究者を雇用し、同施設の特徴でもあるオープンラボを活用しつつ、優れた国際共同研究を推進していくこととしています。



ティーブレイク時に懇談する、左から、須田施設長、滝口エイズ学研究センター長(当時)、谷口学長(当時)

REPORT

国際先端科学技術研究拠点施設開所式および
自然科学系国際共同研究拠点キックオフシンポジウムを開催

1月29日(木)、国際先端科学技術研究拠点施設(IRCAST)の開所式および大学院先導機構自然科学系国際共同研究拠点キックオフシンポジウムが開催され、学内外から70人を超える人々が参加しました。

IRCASTは、新構造部材開発・新機能性材料創製・加工技術開発などを行う施設として建設され、国内外から集まった研究者が、世界最先端の材料開発に取り組みます。

開所式では、谷口学長(当時)より「国際通用性の高い大学へ機能強化を図り、世界の人々が憧れる大学を目指して、地域に根差しグローバ



ルに展開する未来志向の研究拠点大学として社会の改革を牽引したい」とのあいさつがありました。引き続き行われたシンポジウムでは、



革新的なイノベーション創出に向けた研究拠点の在り方と若手人材の育成について活発な意見交換が行われました。

REPORT 人文社会科学系国際共同研究拠点
キックオフシンポジウムを開催

平成26年12月18日(木)、大学院
先導機構人文社会科学系国際共同
研究拠点キックオフシンポジウム
「熊本大学から世界へ—人文社会科
学の挑戦—」が、工学部百周年記念
館で開催され、学内外から100人を
超える参加がありました。

開会のあいさつの中で、谷口学長
(当時)は「本学がCOE(Center of
excellence)として地域課題解決を世
界へ発信していく上で、今後さらに世
界情勢が複雑化していく中、人文社
会科学分野が果たす役割が重要に
なってくるに違いない」と述べました。
その後、筑波大学大学研究センター



長の吉武博通氏と、日立総合計画研
究所の所長代理である田村豊一郎氏
による基調講演や、拠点メンバーによ
る最先端の国際共同研究の紹介が行



開会のあいさつをする谷口学長(当時)

われ、さらにパネルディスカッション
では、国際ランキングの過度な重視に
対する議論など、活発な意見が交わさ
れました。

REPORT 米国ジョージア州立大学に
国際共同研究ラボを設置

2月、米国ジョージア州立大学バイ
オメディカル研究所に、本学の国際共
同研究ラボ(海外ラボ)がオープンし
ました。これは、本学が「スーパージ
ャーナル大学創成支援」事業に採択
されたことを受け、本学の創薬研究セ
ンター長である甲斐広文教授が、バイ
オメディカル研究所長のリー教授に
依頼し、実現したものです。

両教授はおよそ20年間、共同研究
を実施し、お互いの研究室から高いレ
ベルの国際共著論文を発表していま
す。また、甲斐教授の研究室からリー
教授の下に長期に派遣された大学院
生は14人を超え、国際的なセンスを身
に付けた若手研究者の育成に貢献し
てきました。海外ラ
ボの設置により、今
後さらに密な国際共
同研究の発展が期
待されます。



本学から派遣中の大学院生や本学出身のポストドクたちと
歓談するリー教授(左から3人目)と甲斐教授(同4人目)

REPORT 第4回熊本城マラソンで
ランナーの救護活動を行いました

2月15日(日)に行われた「第4回熊
本城マラソン」で、熊本大学医学部附
属病院循環器内科の小島淳医師(心
不全先端医療寄付講座特任准教授)
をはじめとする医師、看護師、事務、医
学部・薬学部学生総勢25人でラン
ナーの救護活動を行いました。

熊本城マラソンでは、毎年
熊本病院として救護所を2カ
所(南熊本と川尻)設置してい
ます。また今大会からメディカ
ルランナーとして、熊本病院か
ら5人の医師、看護師、技師が
スタートからゴール地点まで走
りながら必要な救護にあたり

ました。

今年は例年に比べ気温が高かった
ため、低体温は見られず、脱水や筋攣
攣が数多く発生しましたが、心停止な
どの重篤な事案はなく、無事大会も
終了しました。



REPORT 環境報告書「えこあくと」が3年連続
「環境コミュニケーション大賞(環境報告書部門)」を受賞

本学の環境に関する活動や取り組
みをまとめた熊本大学環境報告書
「えこあくと2014」が、環境省などが
主催する第18回環境コミュニケーション
大賞の環境報告書部門において「環境
配慮促進法特定事業者賞」を受賞し
ました。今回で3年連続の受賞とな
り、2月25日(水)に品川プリンス
ホテル(東京都)で表彰式が行われ
ました。

「えこあくと2014」はデザインが大
変読みやすく工夫されており、図やイ
ラスト、写真の効果的な配置、文字の
大きさによるポイントの把握のしやす
さなどが評価されました。また、エコ

キャンパスの実現に向けたエネル
ギー対策や自然共生について、デー
タに加えてさまざまな取り組み・対策
を記載した点も高評価でした。受賞を
受け、今後とも「環境モデルエコ・カ
ンパス」の実現に向けて尽力してい
きたいと考えています。



右は、表彰を受ける倉田裕財務・施設担当理事(当時)

REPORT

平成26年度の課外活動指導者への感謝状贈呈、
学生表彰、学長特別表彰を行いました

3月20日(金)、工学部百周年記念館において、平成26年度の課外活動指導者に対する感謝状贈呈および学生表彰、学長特別表彰を行いました。学術研究や課外活動において優秀な成績を修めた、または顕著な活動が認められた学生や学生団体を表彰するとともに、課外活動指導者に対する感謝状を贈呈しました。また、今年度から新設された英語外部試験成績優秀者への学長特別表彰も同時に執り行われました。

なお、課外活動指導者に対する感謝状贈呈および学生表彰者の一覧、また英語外部試験成績優秀者への



学長特別表彰者の一覧は、WEBマガジン「熊大なう。」に掲載しています。右記のQRコードからもご覧いただけます。



INFO

熊本大学埋蔵文化財調査センター「地下と地上の文化財散歩」

本学は県内有数の遺跡の上に立地しており、開発工事に先立つ発掘調査で、古くは縄文時代にさかのぼる生活の跡が見つかっています。黒髪地区、本荘地区のキャンパスを巡りながら、縄文時代から明治時代までの地下と地上の歴史をご案内します。



(上)埋蔵文化財調査センター展示室
(左)土製印(古代)



日時・場所／

6月1日(月)～3日(水)13:00～
黒髪キャンパス(集合:黒髪南キャンパス総合情報基盤センター入口)
6月4日(木)・5日(金)13:00～
本荘キャンパス(集合:本荘北キャンパス熊本大学医学部附属病院 外来診療棟玄関)

※少雨決行。荒天時中止。雨天時は電話かHPで開催をご確認ください

【問い合わせ】

埋蔵文化財調査センター
Tel.096-342-3832
URL:<http://www.kumamoto-u.ac.jp/organizations/maibun>

INFO

「フォーラム がんと生きる～ここから私らしく～」を開催

がんになっても、それまでの暮らしを諦めず、自分らしく生き抜く時代。完治を目指す治療がある一方、がんによって生じる“痛み”をできるだけ減らしていく治療やケアも始まっています。日々進化するがん治療と副作用への対処法など、最新の医療情報とともに、本人に寄り添う支援のありようについて、医療従事者、当事者の方が語り合います。本学生命科学研究部消化器外科の馬場秀夫教授がパネリストとして出演します。

日時／4月11日(土)
13:00～15:30

場所／市民会館崇城大学ホール大ホール
参加費／無料
事前申込／次の事項をご記入の上、はがき、FAX、メール(HPの申し込みフォームから)でお申し込みください。
①名前(必ず個人名を記入)②郵便番号・住所③電話番号④参加人数⑤一緒に参加される方の名前(複数名の参加を希望される場合)

【申込・問い合わせ】
NHK厚生文化事業団
Tel.03-5728-6633
(平日10:00～18:00)
Fax.03-3476-5956



熊本大学基金へのご協力に感謝し、心より御礼申し上げます。

No.29(平成26年12月1日～平成27年2月28日)

卒業生の皆様、在学生の保護者の皆様、法人・団体等の皆様、本学の退職者及び教職員の皆様から、これまでに約5億8964万円(平成27年2月28日現在)のご寄附をいただき、臨床医学教育研究センター建設や本学学生の留学支援、課外活動支援、60年史編纂事業等、研究・教育に資する事業に取り組ませていただきました。皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

今号では、平成26年12月1日から平成27年2月28日までの間に入金を確認させていただきました個人53名、2法人・団体等の寄附者すべての皆様へ感謝の意を込め、ご芳名を掲載させていただきます。公開を希望されない寄附者の皆様につきましては、掲載しておりません。

また、万一お名前に記載漏れがある場合は、誠に恐縮ではございますが、基金事務局(電話:096-342-2029)までご連絡ください。皆様の更なるご支援とご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

1. お名前・寄附金額の掲載を希望された寄附者の皆様

(寄附金額別、五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。) ※〔 〕内の数字は、累計寄附金額(万円)です。

【100万円】	一般財団法人化学及血清療法研究所(11700)
【10万円】	菊池 健(160)
【6万円】	工業化学科昭和39年卒業生有志
【5万円未満】	奥村 恵一郎 志垣 信行 笠 裕之

2. お名前のみ掲載を希望された寄附者の皆様

(五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。) ※〔 〕内の数字は、累計寄附回数(回目)です。

泉水 仁	出田 秀尚[6]	有働 征士[2]	江川 功	岡 徹平[2]	勝田 昭一
木村 加代子	桑原 明子[2]	高田 千年	橋 昭子	永木 恵一郎	永田 徹也[4]
長谷 年弥	中西 康之	中村 英子	波多野 恭行[3]	林 良助[2]	林田 光[2]
早野 昭一	原野 佳士	真佐喜 彰[3]	松村 保広	宮里 邦子[2]	向井 諭[2]
森田 直子	山内 典博[2]	山城 重雄[4]	吉野 克子[2]		

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった寄附者の皆様

個人21名

INFO 「第6回熊本大学東京連合同窓会」が開催されます

第6回となる「熊本大学東京連合同窓会」が開催されます。

今回は、熊本大学大学院自然科学研究科の戸田敬教授から「熊本の大气・世界の空気をみる(仮題)」と題し講演が行われます。関東地区にご在住の皆様、是非奮ってご参加ください。

日時／平成27年5月30日(土)

15:00～19:00予定

場所／東京ガーデンパレス

参加費／7,000円

(交流会参加者のみ)

申込／次の事項をご記入の上、FAXまたはメールでお申し込みください。

①ご氏名②ご住所③電話番号④卒業学部⑤卒業年⑥FAX番号⑦交流会参加の有無
※詳細は熊本大学ホームページをご参照ください。

【申込・問い合わせ先】

熊本大学マーケティング推進部

基金・同窓会担当

Tel.096-342-2029

Fax.096-342-3149

E-mail: kik-doso@jimu.kumamoto-u.ac.jp



第5回開催の様子

創造する森 挑戦する火

パワーリーダーの育成
知のパラダイム

イノベーション創出

五高からつづく伝統

「くまもと」と世界をつなぐ

緑豊かな都市型キャンパス

コンパクトユニバーシティ

グローバルネットワーク

実践的課題解決力

世界を牽引する研究



井上雄彦記す



熊本大学
Kumamoto University

〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1

TEL.096-344-2111(代)

<http://www.kumamoto-u.ac.jp/>

■黒髪キャンパス ■本荘・九品寺キャンパス ■大江キャンパス